

信仰の忍耐

(Ichthys.com にてオンライン閲覧可能)

ロバート・D・ルギンビル博士第一ペテロ 1 章 3-5 節(翻訳)

「わたしたちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は豊かなあわれみにより、わたしたちを新しく生まれさせて、死者の中からのイエス・キリストの復活を通して生きた希望へと導き、また決して滅びず、汚されず、しぼむことのない資産へと導いてくださいました。その資産はあなたがたのために天に蓄えられていて、あなたがた自身もまた、神の力と神に対する信仰によって守られており、終わりの時に現される救いへと至るのです。」

序論と復習： 第一ペテロ 1 章 3-5 節における中心的な主題は、私たちがキリスト者として「新しく生まれた」ということです。この劇的な新生は、私たちとこの世との関わり方を根本的に変えてしまう新しい関係性の中へと、私たちを導き入れました。ペテロは、三つの重要な変化を挙げています。それぞれはギリシヤ語の前置詞 eis(～へ、～に)によって導入されており、私たちが新しく入れられた三つの祝福を指しています。それは「生ける希望」「朽ちない資産」「最終的な救い」です。これら三つは、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの再臨の後に実現する、栄光に満ちた現実を指しています。神の目に「新しく生まれた者」とされている私たちの新しい命は、魂の中に据えられた錨のようなものであり、やがて明らかにされる天の現実としっかり結びついています。「生ける希望」「朽ちない資産」「最終的な救い」という三つの祝福はすべて、イエス・キリストに対する信仰を通して神の恵みによって新しく生まれた私たちの命の特徴です。そしてそれぞれは、キリスト者の三大徳である信仰・希望・愛のいずれかに対応しています。

生ける希望： まず第一に、私たちは「イエス・キリストの死者の中からの復活を通して、生ける希望へと新しく生まれた」のです。この「生ける希望」とは、私たちの体の復活を意味します。すなわち、欠陥のある地上の器が、栄光に満ちた永遠の住まいへと変えられることです。今は神の目において位置的にこの永遠の命をすでに持っていますが、そのすべての栄光を体験するのはキリストの再臨の時です。希望という徳は、この祝福された最終的な現実にも全的な信頼を置くことを意味し、それによって私たちは朽ちてゆく肉体や、この世における失望を忍耐できるのです。

朽ちない資産： 第二に、私たちは「決して滅びず、汚されず、しぼむことのない資産へ

と新しく生まれ、その資産は天に蓄えられている」と言われています。この「朽ちない資産」とは、キリストの裁きの座において各信者が受け取る報いを指しています（[ヘブル9章15-16節](#)参照）。その時、私たちの地上での行いが、主ご自身によって吟味されるのです。この報いは永遠であり、地上で悪魔が支配している間に享受できるどんなものとも比べものになりません。イスラエルの人々が何世代にもわたって約束の地に入る日を待ち望んだように、私たちもキリストに従って天の御国に入る日を待ち望んでいます。そしてそこで、この地上の歩みで成し遂げた働きの実を刈り取るのです。この側面は「愛」という徳に対応しています。神が人類を愛してキリストを与えてくださったように、私たちがその愛を反映させ、神のために歩み仕えることによって報いが与えられます。その報いは「朽ちない」ものです。すなわち、壊されることも、汚されることも、色あせることもありません。盗人が押し入ることも、虫が食い荒らすこともなく、永遠に私たちのものとして保たれます（[マタイ6章19-20節](#)参照 https://ichthys.com/Tribulation-Part6.htm#7_The_Judgment_of_the_Churchも参照）。

最終的な救い： 第三に、私たちは救いの確証を持っています。すなわち、キリストを信じる者として「神の力と神への信仰によって守られており、終わりの時に現される救いに至る」のです。この「最終的な救い」とは、歴史の終わりにおいて、個々の信者に対して神が約束されたことの成就を指します。私たちは文字通り、歴史の最後に「裁きの火から救い出される」ことになるのです。ペテロは聞き手がすでに「終末」に関する基本的な事柄を理解しているものとして、この救いを語っています。そして、この救いは主イエス・キリストへの継続的な信仰に依存しています。復活こそ、この聖書の約束が成就する時点です。したがって、その救いが実際に起こる時と状況は、キリストの再臨によって区切られる次の二つの復活の段階に応じて異なります。しかし、私たちが新しい体を持って主の御前に立つとき、その目的は私たちの「救い」を吟味するためではありません。むしろ、私たちの生涯における奉仕を評価するためなのです（[第一コリント3章15節](#)）。そして、「生ける希望」が復活を指し、「朽ちない資産」が愛という徳と結びついていように、この「最終的な救い」は信仰という徳と切り離すことができません。私たちは「神の力と私たちの信仰によって守られている」と、[第一ペテロ1章5節](#)に記されています。神の力が揺らぐことは決してありません。しかし、人間の弱さを考えると、この点——すなわち救いの確証が信仰に依存しているという事実——については、十分に注意を払う必要があります。すでに第18講で学んだように、「栄光の冠」は、信仰と希望を具体的かつ正当な奉仕によって裏づけ、他のクリスチャンの救いと成長に貢献した信者に与えられる報いです。「命の冠」は、試練・迫害・苦難のただ中でも信仰に従って歩み、自分の人生をその信仰と一致させる信者に与えられます。「義の冠」は、この生涯において霊的成熟に到達したすべての信者に与えられる報いです。ですから、これから取り上げるのは、信仰を「失う」と「保つ」とに関する教えなので

す。

信仰を守ること：信仰は、キリスト教徒にとって欠かすことのできない徳目です。私たちはイエス・キリストへの信仰によってクリスチャンとなり、またクリスチャンであり続けるのです。信仰は私たちの「心の目」を形づくります。私たちがクリスチャンになったとき、信仰は手を伸ばし、イエス・キリストの良き知らせを受け取りました。知性によってでもなく、科学的な実験によってでもなく、信じるという行為、すなわち信仰によって、私たちは福音を受け入れ、イエス・キリストを信じました。神が私たち個人に対して福音を「証明」してくださるのを待ったのではなく、証拠なしに、目で見ることなしに、私たちは神の御言葉と約束に信頼を置いたのです。神が聖書の中で語られたこと、すなわちイエス・キリストを信じる信仰によって私たちは世とともに滅びることなく、永遠の命を得る、ということ信じたのです。神はその約束を与え、私たちはそれを信じました。私たちは神を信頼しました。神の誠実さと御性質を信じ、約束されたことを必ず公平かつ正義をもって成し遂げてくださると信じました。なぜなら神は神であられるからです。その御子イエス・キリストの犠牲のゆえに、聖書の膨大な証言のゆえに、そして私たちの日常の経験の中においても、信仰の目によって私たちは今、聖霊がかつて私たちに示してくださったことを見るのです。すなわち、神は信頼に値するお方であり、頼るに足るお方であるということです。神はこれまで一度も私たちに失望させたことがなく、これからも決して失望させることはありません。御子を信じるすべての者は神の子どもです。彼らは世とともに滅びることはありません。私たちは、物理的な目に何が映ろうとも、神の力強い守りのゆえに確かに安全なのです。私たちは実際に「神の力によって守られている」のです——そして「信仰によって」も守られています。[第一ペテロ 1 章 5 節](#)でペテロが思い起こさせるように、私たちが望み、期待する「最終的な救い」は、依然として信仰にかかっているのです。誤解してはいけません。信仰は私たちの意志に委ねられており、功績によるものではなく、物質的・金銭的投資によるものでもなく、知的な発展によるものでもありません。それでもなお、絶対的に不可欠なのです。信仰がなければ、私たちはクリスチャンではありません。聖書においてクリスチャンとは「信じる者たち」と定義されているからです([ローマ 3 章 22 節](#)など)。

救いの保証：ピリピの看守が自らの救いの必要性を悟らされたとき、彼はパウロとシラスに非常に率直に尋ねました。「先生方、救われるためには、私は何をしなければなりませんか」。すると彼らは同じく率直に答えました。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも、あなたの家の者も救われます」([使徒 16 章 30-31 節](#))。この議論の冒頭で(信仰へのさまざまな攻撃と信仰を守る必要性について詳しく述べる前に)、覚えておくべき大切なことがあります。それは、キリストに対する信仰とそれがもたらす救いは非常にシンプルであるということです。シンプルであるというのは、救いが比較的「私た

ちにとって」容易に与えられる(なぜならキリストが代価を払ってくださったから)という意味であり、また、神がすべての信者に望んでおられるのは、生涯を通して信仰を持ち続け、最初にキリストを信じたその信仰によって得られた救いに到達することだ、という意味でもあります。ですから、私たちは自分の救いについて過度に不安になる必要はありません。自分自身に問いかければよいのです——私はイエス・キリストを信じているだろうか？ 私は本当に主の弟子なのだろうか？ これがパウロの言う「自分自身を吟味して、信仰に生きているかどうかを確かめなさい」([第二コリント 13 章 5 節](#))の意味です。また、クリスチャン生活において信仰が試されることがないなどと考えるべきではありません。時には非常に厳しく試されることさえあるのです。実際、私たちが今まさに学んでいるこの手紙の著者(ペテロ)自身が、かつて主を三度否んだことがありますが、その後回復したのです。そして回復した彼は、その後、歴史上最も偉大な信仰者の一人となりました。信仰は試されることによってしか強められないのです。このことをペテロはよく知っていました([第一ペテロ 1 章 6-9 節](#))。

信仰：信仰とは「信頼」です。「イエス・キリストを信じる」と言うとき、私たちは神と御子について神ご自身が証しされたことを信頼すると告白しているのです。神と神の御言葉を信頼すること、それはキリストがメシアであり、この世に来て罪とさばきから私たちを救ってくださったお方であり、その御業は父なる神の完全な満足のうちに成し遂げられたということ、そして私たちが本来ならば絶望的に失われていたにもかかわらず、キリストが十字架で身代わりとなって死んでくださったゆえに、信仰によって救われている、ということです。やがて私たちは人類に共通の敵である「死」と直面します。そのとき、私たちの人間的な経験のすべて、私たちの目に見えるすべてが「希望などない」「死が終わりである」と告げるでしょう。けれども、そのとき私たちは目に見えるものではなく、神を信じるのです。神が私たちに行使するように与えてくださった信仰によって歩むのです。肉の目にはこの世しか見えませんが、信仰の目によってのみ、この世の覆いを超えて見ることができます。信仰によって、私たちは神が死に打ち勝ってくださったと信じるのです。神が本当に御子を私たちのために犠牲としてささげ、私たちの罪を贖ってくださったと信じるのです。そして神が実際に御子イエス・キリストを死からよみがえらせてくださり、同じように私たちをもよみがえらせてくださると信じるのです——ただし、私たちが信じるならば、私たちが神を信頼するならば、です。

信仰は「一度きりの出来事」ではありません。確かに、多くの信者が「自分が初めて信じた時のこと」を懐かしく覚えています。しかし、私たちの多くにとって、信仰とはまるで種まきの譬えの種のように、徐々に育っていったものでした。そしてある日、自分が神を本当に信頼していることに気づいたのです——この世がただ絶望しか見いだせないところで、私たちは信仰の目によって永遠のいのちの現実を見たのです。イエス・キ

リストにおける永遠のいのちの約束を、ある特定の時点で意識的に受け入れ、それを思い出すことができる人もいれば、いつ、どのようにその奇跡が起こったのかはっきりした記憶がない人もいます。けれども、神の御言葉を信じ、墓を越えたその先のいのちのためにイエス・キリストに信仰を置いた私たちは、皆同じように神の家族の一員であり、信仰によってこの人生を耐え忍び、信仰によって次のいのちを待ち望んでいるのです。

信仰は献身を伴います。どのクリスチャンも証しできるように、キリストを信じたからといって、この地上での生活が容易なものになるわけではありません。そんなはずはないのです。キリストご自身が「自分の十字架を負って、わたしに従いなさい」([マタイ 16 章 24 節](#))と言われ、犠牲の伴う道を明言されたからです。建築家が建築を始める前に費用を計算しなければならないように([ルカ 14 章 28 節](#))、私たちもキリストに従う生涯が決して困難から無縁ではないことを最初から理解しなければなりません([第一ペテロ 4 章 12 節](#))。クリスチャンは、人類に共通する試練や誘惑だけでなく、敵である悪魔とその手下たちの積極的な攻撃にも直面します([第一ペテロ 5 章 8 節](#))。種まきの譬えは、イエス・キリストの福音を聞いたすべての人が神の国に入るわけではないことを明らかにしています([マタイ 13 章 18-23 節](#))。私たちが以前本ペテロ・シリーズ#12-#13で詳細に学んだこの譬えは、キリストの招きに対する応答を四つのカテゴリーに分けています。すなわち、1) 御言葉を聞いても信じない人々(道端に落ちた種)、2) 喜んで福音を受け入れるが、後に離れてしまう人々(岩地に落ちた種)、3) この世の心配や欲望に心を奪われる人々(茨の中に落ちた種)、4) 御言葉を正しく受け入れ、100倍、60倍、30倍の実を結ぶ人々(良い地に落ちた種)です。特に第三のカテゴリーは、この文脈において最も解釈が難しいと言えます。茨の中に落ちた種は「信仰の芽」を出しますが、その芽は塞がれてしまい、マタイの記録によれば「実を結ぶまでに至らない」のです。第四のカテゴリーに属する人々は確かに信者であり、神の国に安全に入る者たちです。また、第一のカテゴリーの人々については、サタンに惑わされて信じる前に奪われると明確に語られています。第二のカテゴリーの人々は、信仰の歩みにおいて「つまずく」人々であり、ルカの記録によれば「信仰から離れる」のです([ルカ 8 章 13 節](#))。ここで用いられている「離れる(aphistemi)」という動詞は、「背教(apostasy)」という言葉と同じ語根からきています。第三のカテゴリーに属する人々については、三つの記録すべてにおいて、「この世の心配や快樂に心を奪われるために実を結ばなくなる」とだけ記されています。私たちが最近学んだように(#18のレッスン参照)、真の信者が生涯を全く無益なまま終えることはありません([ヤコブ 2 章 26 節](#))。種まきの譬えの記述は、私たちに警告を与えるためのものであり、成熟に至らず、主のためにほとんど何も実を結ばない信者を描写しています。そのような人々は、単にこの世でキリストにとって非効率的であり、彼らの業はキリストの裁きの座で焼き尽

くされる信者(第一コリント 3 章 12-15 節)に相当するのかもしれませんが。しかし、また別の可能性として、最初に御言葉から芽生えた信仰の芽が、欲望や関心に心を奪われて最終的に枯れてしまった元信者を指している場合もあるでしょう。いずれにせよ、第三のカテゴリーに属する人々、すなわち「信仰が塞がれてある」者たちのたとえば、すべての信者に対して「信仰を守り続けよ」という明確な警告です。最も可能性が高いのは、ここには両方のタイプ——すなわち、信仰が揺らいでいる者と、かつて信じていたが今は離れた信者——が含まれているということです。どの解釈を採るにしても、一つだけ確かなことがあります。それは、「茨の中の信者」として数えられるのは、安全でも健全でもない、ということです。私たちがこれまでも見てきたように、また今後も何度も見るであろうように、靈的に安全である唯一の道は靈的成長なのです。キリストにあって成長するためには、キリストに従うことを献身的に決意しなければなりません。

信仰とは、誰か、あるいは何かを信じることです。信仰には必ず対象があり、その行為における価値や功績は、信じる人の側ではなく、信じられる対象そのものにありません。私たちは神を信じます。なぜなら神は、私たちの信頼に値するお方だからです。神は御子において、また御言葉においてご自身を啓示され、私たちが信仰を向けるべき確かな対象をお示くださいました。神は私たちに信じることを命じ、時間や助けや機会や動機を備えてくださり、さらに最も崇高な信仰の対象である御子イエス・キリストを示されました。イエスは私たちの身代わりとして死に、私たちの罪のために死に、私たちが永遠に生きることができるように死んでくださったのです。信仰は、その対象を離れては存在しません。神がおられなければ、御言葉がなければ、そして神の正確なかたちであり御言葉そのものの具現であるイエス・キリスト(ヘブル 1 章 1-4 節)がなければ、信仰など存在し得ないのです。もし信仰がこの対象に根ざしていなければ、それはもはや真の信仰とは言えません。

ですから、信仰は私たちにとって唯一の選択肢なのです。私たちが信仰にとどまり、神と御子イエス・キリストに信頼を置き続ける限り、私たちは神の力と私たちの信仰によって守られ、「時の終わりに現されるように用意されている最終的な救い」にあずかることができると、5 節が語っています。いかなる代償を払ってでも、私たちは「信じ続ける」ことをやめてはなりません。なぜなら、不信仰のもたらす結果は、あまりにも恐ろしいものだからです。

永遠の保障：聖書が教える真理は、私たち信者が神の力によって「守られ」、この不信仰の世に必ず臨むさばきと滅びから「救い出される」ことであり、これはしばしば福音派の中で「永遠の保障(Eternal Security)」の教理として語られています。この言葉自体には本質的に問題はありますが、この表現はしばしば「一度イエス・キリストを信じ

たならば、その後何が起ころうとも、その人の天における立場は永遠に保障されている」という意味に受け取られてきました。この見解によれば、重大な罪を犯しても、他の信者や信仰そのものに敵意を示しても、さらにはキリストを公然と否認したとしても、要するにどのようなことをしても、その人を神の愛から引き離すことはできないのだとされます([ローマ 8 章 39 節](#))。言い換えれば、「一度救われたら、永遠に救われている」という考え方です。

しかし、この極端な見方には問題があります。それは、多くの明白な聖書箇所を無視してしまっているという事実に加え、神の御性質と神の義を軽視しているからです。神は愛なるお方です(第一ヨハネ 4 章 8 節)。その愛のゆえに、神は御子イエス・キリストをこの世に遣わし、全ての人のために死なせてくださいました(ヨハネ 3 章 16 節)。しかし、だからといってすべての人が救われるわけではありません。このことは「永遠の保証」を唱える人々もよく理解していることです。神はすべての人が救われるために必要なことをすべて備えてくださいました。ただし、人間の自由意志を侵すことだけはなさいません。同じように、救われた後の信者に対しても、神は信仰を持ち続けるために必要なすべてのもの——御霊の内住を含め——を与えてくださいます。しかし、信仰にとどまり続けることは、忍耐と持続、そして日々の「神を選び、悪魔の世に背を向ける」決断を要するのです。種蒔きのたとえがこの点を明確にしています。多くの人が御言葉を聞きますが、ある人々は心に受け入れません。ある人々は受け入れても、最初の試練でつまずきます。ある人々はこの世の思いや欲に絡め取られ、徐々に実を結ばなくなります。そして、ただ良い地に蒔かれた人々だけが、信仰を保ち、神のために実を結ぶのです([第二ペテロ 1 章 10 節](#)参照)。したがって、私たちは確かにイエス・キリストにある信者として、永遠の救いに固く結びつけられています。しかしそれは、私たちが真実に信仰を持ち続ける限りにおいてのみ保証されているのです。

忍耐について: 忍耐とは、最後まで持ちこたえることを意味します。キリスト者の文脈においては、地上での生涯の終わりまで、あらゆる試練の中で信仰を堅持し続けることを意味します。忍耐が決して容易な務めではないことは事実です。聖書全体を通して、信仰が極めて厳しい試練にさらされる信者たちの姿を私たちは見ます。アブラハムが自らの子を犠牲として捧げるよう命じられたこと、ダニエルが獅子の洞穴に投げ込まれたこと、ヨセフが牢獄に入れられたこと、そしてエレミヤが泥沼の穴に沈められたことなどは、信仰に大きな力を必要とした極限の状況の例です。このような苦境において、信者は過去の偉大な信仰者たちがそうであったように、ただ神の義と公正に全面的に依り頼むしかありません。私たちが苦難から解放される過程が、出エジプトの民が体験したように長く奇跡的なものであるにせよ、あるいは私たちの目にはそれほど劇的ではないにせよ、私たちは二つの確信を持つことができます。第一に、この世に生きている限

り、私たちの信仰は必ず試されるということ。第二に、神は私たちが直面するあらゆる事態に耐えられるよう、必ず備えをしてくださっているということです([第一コリント 10 章 13 節](#))。

出エジプトの時代にモーセとともに歩んだイスラエルの世代は、忍耐の必要性に関する重要な教訓を私たちに残しています。パウロが指摘するように、「彼らはみなモーセに属し、みな同じ霊的な食べ物を食べ、霊的な岩から飲みました……それにもかかわらず、神は彼らの大多数を喜ばれず、彼らは荒野で倒されました」([第一コリント 10 章 2～5 節](#))。この世代は最初は確かに神を信じました。家の門柱に小羊の血を塗り、死の使いを免れ([出エジプト記 12 章 13 節](#))、また「信仰によって」紅海を渡りました([ヘブル 11 章 29 節](#))。しかし、その初めの信仰にもかかわらず、また数々の奇跡を体験したにもかかわらず、彼らの信仰は長続きしませんでした。荒野をさまよう中で彼らは繰り返し神(とモーセ)を試み、その結果、神はついに彼らの大半を滅ぼされました([ユダ 5 節](#))。

この出エジプトの世代の経験は、もう一つの観点からも重要です。終末の大艱難期を通過することになる信者たちは、彼らと似たような経験をする事になり、信仰を失って「気落ちする」ことのないように警戒する必要があります。[マタイ 24 章 13 節](#)におけるキリストの言葉は、その未来の時代を指して語られたものですが、同時に、私たち一人ひとりが「今ここで」経験している小さな患難にも当てはまります。その箇所ではイエスは、「最後まで耐え忍ぶ者が救われる」と語られました。その意味は、前に述べたとおりです。生涯の終わりまで信仰を持ち続ける者こそ、信仰者としてこの世を去り、良い地に蒔かれ、最後まで実を結び続ける植物となるのです。

信仰は骨の折れる務めです。[第一テサロニケ 1 章 3 節](#)で、パウロはテサロニケの信徒たちの「信仰の働き」に言及し、彼らが経験していた試練や人生の不公平さのただ中で、その信仰を守り続けるために多大な努力を払っていたことを示しています。これらのテサロニケの信徒たちは「同国人から苦しめられ」([第一テサロニケ 2 章 14 節](#))ましたが、このように忍耐はしばしば犠牲を伴うものです。それでもなお、未来の艱難の時代に信者たちが最も困難な試練の中で救われるのは、まさにこの忍耐、すなわち信仰の忍耐と持久によるのです([マタイ 24 章 13 節](#); [ルカ 21 章 19 節](#))。忍耐にはさまざまな形がありますが、ヘブル書の著者が明らかにしているように、私たちは皆、キリストを信じる時に出発した「不信仰の地」に戻る可能性を持っています([ヘブル 11 章 15 節](#))。しかし信仰を保ち、「忍耐」することによって、私たちは自らの救い主イエス・キリストを受け入れたときにした約束に忠実であり続けるのです。一方で、その「不信仰の地」に「戻る」ことは、多くの場合、欺かれる過程をたどることになります。信者をあからさ

まに誤った方向へ引き返させるやり口が明らかに示されることは、めったにありません。私たちの敵である悪魔は、それほど単純ではありません。むしろ、不信仰へと滑り落ちる坂は、往々にして巧妙に隠されています。そしてその坂は、しばしば個人的な罪によって「油が塗られて」いっそう滑りやすくされているものです。以前の学びから覚えているように、私たちは皆、罪深い本性を持つこの肉体に生きている限り、罪から完全に自由になることはできません。しかし、時折のつまずき(これも神の懲らしめから免れるものではありません)があっても、それに対して悔い改めと告白を伴うのであれば、それは神に対する反逆を意味するものではありません。けれども、悔い改めもなく、告白もなく、しかも自己正当化を伴うような、繰り返される頑なな罪の生活は、信者を神から疎外してしまいます。それは神の怒りと懲らしめを招くだけでなく、その人の神との関係をも損ない、信仰の衰退を加速させます。これはまさに出エジプトの世代に見られた状況と同じです。彼らは最初は信じましたが、その後は常習的に神を疑い、神を責め、神を裏切ることが繰り返されました(詩篇 78 篇参照)。彼らのこの行動は、まず神への信仰を失わせ、その関係を壊してしまったのです。これこそが背教(アポスタシー)です。

罪と信仰は両立しません。私たちが罪を犯すとき、それは実質的に、その罪によってもたらされようとしている問題の解決や必要を満たすことを、神様が成し遂げてくださると信頼していないことを表しているのです。霊的成長の正しい道を歩んでいる信者にとっては、このようなつまずきはすぐに悔い改め(自分の過ちを認識し、それを退けること)と告白(祈りの中で神に自分の過ちを認めること)によって処理されるべきものです。しかし、神を無視して悔い改めもなく、罪を自分の生活の常習的な一部として選び取ってしまうなら、そのような行動は酸が金属を蝕むように信仰を蝕んでいきます。これこそが、パウロが「罪の報酬は死である」(ローマ 6 章 23 節)と言っている意味です。つまり、個々の罪そのものが直ちに私たちを滅ぼすのではなく、むしろ罪の生活に完全に身を委ねることによって、信仰そのものが死んでしまうということです。そしてキリストに対する信仰を失うなら、私たちはもはや裁きの日において自分の身代わりとなっておられる方を持たなくなるのです。ですから、もし私たちが信仰から「離れ落ちる」なら、神が私たちを「喜ばれる」ことはもはや期待できません(ヘブル 10 章 37-39 節)。ヤコブも同じことを述べています。すなわち、罪は完成に至ると死を生む——ここで言う「死」とは霊的な意味での死、すなわち信仰の死です(ヤコブ 1 章 15 節)。この同じ理由で、パウロは私たちに警告しているのです。異邦人信者に対して「高ぶってはいけない」と語り、不信仰のゆえにイスラエルが「切り去られた」ように、私たちも同じ不信仰によって同じ結果を招くことになると言っています(ローマ 11 章 20-26 節)。最終的な問いは、私たちが本当に自分の知っている真理に忠実であり続けるかどうかです。ヨハネが述べているように、「あなたがたが初めから聞いたことが、あなたがたのうちにとどまるなら、あなたがたも御子と御父のうちにとどまる」(第一ヨハネ 2 章 24 節)ので

す。すなわち、福音の真理に忠実であり続ける限り、私たちは救いに対して確信を持つことができるのです。

心のかたくなさ(Hardening): 神は人間の心、すなわち思いを、真理を受け入れることができるように造られました。私たちが神の御言葉を最初に聞いたとき、それを真理として認識できるのは人間としての生まれ持った特権なのです。しかし、それを真理として受け入れるかどうかはまた別の問題です。実際のところ、神からの啓示の現実と真実性を拒むことは、人類の大多数にとって長い伝統のようなものになっています。神はご自身についての真理、すなわちその神性と御性質を万人に明らかにしてくださいましたが、それにもかかわらず、多くの人はその真理を無視し、不信仰を選び取ってしまいます([ローマ 1 章 19-20 節](#))。聖書の観点からすると、私たちが知っている真理を拒むことは極めて危険な過ちです。なぜなら、神の真理を拒むことと偽りを受け入れることは切り離すことができないからです。逆に言えば、真理を受け入れることは偽りを拒むことでもあります。私たちは今、神と悪の力との間で繰り広げられている宇宙的戦いのただ中に置かれており、その中で真実と虚偽のどちらかを選ぶ責任を免れることはできません。ですから、パウロが不信仰者について「彼らは神を神としてあがめず、その神性を理解していながらも、その思いは愚かになり、その心(聖書が言うところの内なる人)は暗くされた」と言えるのです([ローマ 1 章 21 節](#))。さらに、[エペソ 4 章 18 節](#)でパウロは、真理を拒むことで心が曇らされる過程についてより詳しく述べています。彼はそこで、エペソの信者たちに「異邦人がむなしい心で歩いているように歩いてはならない」と勧めています。彼らは「知力が暗くなり、その無知によって、神のいのちから遠く離れている」のです。その原因は「心のかたくなさ」にあります。心が鈍感になった結果、彼らは「恥知らずになって、貪欲にあらゆる汚れを行うようになった」と記されています。

出エジプト記のパロは、この「心がかたくなになる」過程を示す最も典型的な実例です。すなわち、神の真理を拒絶し、その代わりに悪魔の偽りを受け入れることによって生じる、神に対する知的鈍感さの例です。神がモーセに前もって告げられていたとおり、モーセとアロンを通して神が行われた数々の奇跡や、彼の頑なさのゆえにエジプトに下された多くの災厄に直面してもなお、パロは「心をかたくなにし」、明白な事実、すなわち自分がイスラエルの民を解放せざるを得ないということを拒み続けたのです。[\(出エジプト 4 章 21 節, 7 章 13 節, 8 章 15 節\)](#)。そうすることは、圧倒的で否定しようのない神の力の顕現に直面していながら、その神の力を拒むことと同義でした。実際のところ、神はファラオがかつてないほどに心をかたくなにすることをお許しになりました。ファラオは、あらゆる理性を超えた段階に至るまで、その否定的態度を持ち続ける

ことを神によって許されたのです。ファラオのこの大胆さを思うと恐ろしい限りですが、なおさら恐れるべきは、この世においてイエス・キリストを通して与えられている神の力と救いのご計画を、自らの意思で拒む魂ではないでしょうか。救いの機会がこの人生においてのみ与えられているのは当然のことです。もし救われていない者が、神の栄光を直接に見、そのうえでなお悔い改めることが許されるなら、それは自由意志の公平な試練とはならないでしょう。神を拒むほどに心をかたくなにできるのは、この人生においてのみなのです。

背教(Apostasy)：しかし、今回の学びの主題は、不信者が神を拒む理由やその結果ではなく、むしろイエス・キリストへの信仰によって得られた救いを信者が保持すること(そして失ってしまう可能性)についてです。先に述べた最後の一文こそが、実際に最も重要な点です。すなわち、ある人が実際にキリストを信じている限り、その人は救われており、神の力と私たちの信仰によって保証されている「最終的な救い」を確信をもって待ち望むことができます。その信仰を損ない、浸食し、最終的に死に至らせる要因となるものは、制御されず、認められず、悔い改められていない罪です。クリスチャンとしてふさわしくない行いを悔い改めることなく続けると、やがて信仰生活に大きな打撃を与えます。しかし、問題の核心は罪そのものよりも、むしろ信仰そのものにあります。自らの行いによって神から遠ざかれば遠ざかるほど、再び神に近づくことは難しくなります。ついには、完全に神のもとに行かなくなり、神を拒み、背を向け、否認するに至るのです。自分では「そんなことは絶対に起こりえない」と思っている、聖書はそのようなことが実際に記録され、また予告されています。そして、私たちの周囲でも、かつてはキリストを告白していたのに、ある理由(たとえば人生で予期せぬ悲劇に遭い、それを神のせいにしたなど)によって、完全に神から背を向けてしまった人々を見てきたはずですが。こうして後退してしまった信者は、神の御顔を見ることすらできないほどに心が遠ざかってしまうのです([ヨハネ 3 章 19-20 節](#))。やがて良心は崩壊し、背教は完成してしまいます。

「背教(apostasy)」という言葉は、神から離れ去る現象を表す一般的な用語です。これはギリシア語の言葉を英語に音訳したもので、文字通りには「離れて立つこと(離反)」を意味し、ギリシア文学全体を通じて反逆や反乱を表す語として用いられてきました。したがって、聖書の著者たちがこの言葉を選んだのは、まさに適切であると言えるのです。ですから、聖書の著者がこの語を選んだのは非常に的確でした。というのも、世俗の世界で反逆者や裏切り者と呼ばれるには、まず支配権者に対する忠誠を捨て、拒む必要があるのと同様に、霊的領域における背教もまた、神とその権威を完全に拒絶することを意味するからです。これは、対象となる人がもはや神の存在を信じなくなったという意味ではありません(墮落した御使いたちでさえ「神が存在することは信

じている」のです。そして彼らは身震いしています：[ヤコブ 2 章 19 節](#)）。しかし、その人は神への信仰を捨て、神への忠誠を放棄してしまったのです。

この二つの概念——信仰の喪失と背教——は、ヘブル書の著者によっても結び合わされており、彼は聞き手にこう警告しています。「あなたがたの中に、悪い心を持って生ける神から離れてしまう者がいないように気をつけなさい」と（[ヘブル 3 章 12 節](#)）。またパウロは、かつてのクリスチャンについて、自分自身の正しい生き方と比較しながら、極めて厳しい言葉を使っています。彼と同じように模範となる者もいる一方で、迷い出てしまい、「キリストの十字架の敵」となってしまった者もいると述べているのです。「彼らの行き着く先は滅びである」と（[ピリピ 3 章 18-19 節](#)）。これは驚くことではありません。教会史を振り返れば、多くの場合、背教の傾向は権威ある立場にいる者たち、つまり「偽教師」から始まっているからです。「終わりの日」には多くの信者がそのような偽りの教えに惹かれ、その結果、教師たちと同じように「良心に焼き印を押された者」になってしまいます（[第一テモテ 4 章 1-5 節](#)；[第二ペテロ 2 章 1-3 節](#)も参照のこと）。良心が傷つけられることと背教との関連性も見過ごすべきではありません。パウロはこう言っています。「汚れた者、不信仰な者にとっては何一つ清いものはなく、その思いも良心も汚されているのです」（[テトス 1 章 15 節](#)）。私たちが知っている正しいことを追い求め、それを生活の中で実行しようとしている限り、霊的には安全です。しかし、悪の道を積極的に取り入れるならば、私たちの心を守る番人である良心を損なってしまいます。そしてそれは、最終的には信仰も行いも無関心になる地点へと私たちを導いてしまうのです（[エペソ 4 章 17-19 節](#)参照）。

救いの喪失 (Loss of Salvation)：最初に主を受け入れたすべての人が、最後まで主に忠実であり続けるわけではありません。特に世の終わりには、最初は信じたと告白した多くの人々が、岩地に落ちた種のように、かつては喜びをもって信仰を受け入れたにもかかわらず、やがて信仰を捨ててしまうでしょう（[ルカ 8 章 13 節](#)）。主から完全に離れてしまうことがどれほど恐ろしい災厄を意味するかを考えれば、私たちはヘブル書の著者と同じように言わざるを得ません、「こういうわけだから、わたしたちは聞かされていることを、いっそう強く心に留めねばならない。そうでないと、おし流されてしまう」（[ヘブル 2 章 1 節](#)）。私たちが生きている物質的な世界は、欲に駆られやすい環境を数多く提供しています。それは「誘惑と、わななどに陥り、また、人を滅びと破壊とに沈ませる、無分別な恐ろしいさまざまの情欲に陥る」のです（[第一テモテ 6 章 9 節](#)）。すでに見てきたように、そのような繰り返される罪の生活習慣は良心を麻痺させ、信者を神から遠ざけます。罪を認め、告白することは清めと回復をもたらしますが、傲慢にも悪事をやめようとしない者は、回復することが不可能になってしまいます。ヘブル書の著者が指摘しているように、「そののち墮落した場合には、またもや神の御子を、自ら十字架につけて、

さらしものにする(すなわち、神に対するあからさまな反抗をする)わけであるから、ふたたび悔改めにたち帰ることは不可能である」(ヘブル6章4-6節)。ですから、問題は罪そのものというよりも、むしろ神に従うことを頑なに拒み続けることにあります。そうして自らの意志で信仰を完全に放棄してしまった場合、待っているのは明白な裁きです(第一コリント6章9-10節;ガラテヤ5章19-21節;エペソ5章3-7節)。そのような者に関してペテロは、「義を知った後でそれを捨てるよりも、初めから義の道知らない方がまだましだった」と述べています(第二ペテロ2章21節)。

ですから、天国と地獄、救いと滅びを分け隔てる決定的な境界線は、個々人の心における「信仰(または不信仰)」の態度なのです。パウロの時代の不信仰なユダヤ人たちは、その不信仰によってキリストから引き離され、実際にはその信仰の欠如のために命の木から折り取られてしまいました。しかしパウロは、異邦人である聴衆に向かって警告しています。あなたがたは自分たちの信仰によって立っているのであり、その信仰が堅く保たれている限りにおいてのみ、立ち続けることができるのだと。(ローマ11章20-21節)。このゆえに、私たち信じる者は十分な注意を払う必要があります。自分の立場を過信しすぎないように用心しなければなりません。——それは、すでに救いを失ってしまったかもしれないからではありません(もし信じているなら、私たちは救われているのです)。そうではなく、気の緩んだ態度が、ちょうど出エジプトの子らに起こったように、私たちを危険へと導く可能性があるからです。(第一コリント10章1-12節)。結局のところ、彼らは約束の地に入ることができませんでした。まさにその理由は、数々の不思議や奇跡を目の当たりにしていながらも、彼らの心の中で信仰が不信仰に取って代わられてしまったからです(ヘブル3章18-19節)。したがって、過去の良い経験に頼ることはできません。むしろ、引き続き義と聖めを追い求めなければならないのです。「聖くなければ、だれも主を見ることはできません」(ヘブル12章14節)。私たちが信じ続け、神の言葉が私たちの心の中にとどまり続ける限り、私たちは神のうちにとどまり続けるのです(第一ヨハネ2章24節)。

神の条件(God's Conditions)：忘れてならないのは、救いは神に条件づけられているわけではないということです。世をこれほどまでに愛して御子を与えられた神(ヨハネ3章16節)、すべての人が救われることを望んでおられる神(第一テモテ2章4節)が問題なのではないのです。御子を犠牲として与え、すべての人に当てはまる普遍的な救いの計画を立てられたことで、神はすでにすべての人が救われるために必要なことをすべて成し遂げられました。それでも、私たちの永遠の状態に関しては、この地上での歩みに結びついた条件が存在します。つまり、私たちがまだ完全に永遠の状態に「確定される」前の地上生活において、どう振る舞うかが問われているのです。パウロは、私たちが御前に非のない者として立つように定められているが、それは「もし、あな

たがたが信仰にしっかりと根ざし、動かされることなく、福音に置かれた望みから離れなければ」という条件があるのだと言っています([コロサイ 1 章 23 節](#))。また彼は、「この福音をしっかりと保っているなら、あなたがたはこれによって救われるのです。そうでなければ、あなたがたの信仰は無駄になってしまいます」とも言っています([第一コリント 15 章 2 節](#))。したがって、私たちがキリストに属し続けるためには、最初の確信を終わるまで堅く保たなければならないのです([ヘブル 3 章 6 節, 14 節](#))。しかし、もし私たちが主を否むなら、主もまた私たちを否まれるのです([第二テモテ 2 章 11-13 節](#); [マタイ 10 章 33 節](#); [ルカ 12 章 9 節](#))。

懲らしめによる矯正 (Corrective Discipline): まさに私たちが救いを失うことを避けるために、主は、墮落し始めた者に矯正の懲らしめを与えられるのです。ヘブル人への手紙は、この種の懲らしめの背後にある原則を示しています([ヘブル 12 章 9 節](#))。神の矯正的な懲らしめにどう応答すべきかについて、著者は「私たちは地上の父の懲らしめには従順であったのだから、なおさら霊の父に従って生きるべきではないか」と語っています。すなわち、神の正しい戒めに従うことの終着点は永遠のいのちなのです。逆に、頑なに拒み続けるなら、結末は死となります。

これは、たとえばコリントの教会の一員で、ひどい罪に陥っていた者に対してパウロが下した、一見厳しく思える宣告にも表れています。パウロは特別な使徒としての権威を用いて、その人を「サタンに引き渡す」と決めましたが、それは「肉体が滅ぼされても、その霊が主の日に救われるため」でした([第一コリント 5 章 5 節](#))。つまり、神の守りを取り除き、襲いかかる懲罰を通して悔い改めを促し、最終的には信仰を守らせるためだったのです。同じ書簡の中で、聖餐の乱用に関連してパウロはこうも語っています。私たち信者は「世と共に罪に定められないように、主によって裁かれ、懲らしめを受けているのです」と([第一コリント 11 章 32 節](#))。このことは「死に至る罪」があるというヨハネの言葉とも一致します([第一ヨハネ 5 章 16-17 節](#))。

賢い者への呼びかけ (The Call to the Wise): これまでの学びを通して、私たちはパウロの言葉「罪の報酬は死です」([ローマ 6 章 23 節](#); 同 [6 章 16 節](#); [6 章 21 節](#))を確認しました。しかし同時に、ヘブル人への手紙の著者と共にこう言うこともできます。「しかし、愛する者たちよ。こうは言うものの、わたしたちは、救にかかわる更に良いことがあるのを、あなたがたについて確信している」([ヘブル 6 章 9 節](#))。私たちが信仰・希望・神への愛を建て上げ続けるなら、ペテロが勧めているように「ますます励んで、あなたがたの受けた召しと選びとを、確かなものにしてください。そうすれば、決してあやまちに陥ることはない」([第二ペテロ 1 章 10 節](#))。このようにして「最終的な救い」は必ず私たちのものとなり、主の日に義の冠をいただくことができるのです。そしてそれは、イエス・キリ

ストにあって成長するすべての人々と共に受ける栄誉となるのです。

<ペテロ#22:「信仰のテスト」に続く>